

鎌倉時代の禪宗諸派と密教 (其二)

大 屋 徳 城

第三章 辨圓及び其の門葉と密教

圓爾辨圓は平氏、駿州安倍郡葦科の人也。建仁二年生る。長樂榮朝に參じ、壽福行勇に學び、嘉禎元年四月入宋、仁治二年七月歸國、在宋七年徑山佛鑑の心印を受けて、崇福前水上肥を開き、仁治二年博多承天寺を開く。筑紫に留ること四年、藤原道家父子良實の請に依りて東福寺に住し、壽福建仁の間に禪風を舉揚して、一世の重鎮と爲る。師鍊贊して曰く、「建久間、西明菴導黃龍一派、只濫觴而已、及乎建長年中隆蘭溪、唱道東攘、尙未覃帝京、慧日德協君臣、化洽畿疆、禦外侮而立正宗、整教綱而提禪綱、蓋得祖道之時者乎」と。然れども、辨圓も亦台密の出也。達磨の心印を傳ふるの後と雖も、一心三觀の教説を忘れず、三密加持の金剛乘を舉揚せし也。

辨圓の台密に於ける系統は前出の「天台血脈圖」に詳也。其師とする所は、久能堯辯、長樂榮朝、壽福行勇、久能見西にして、又入宋して、柏庭月公に性具天台の旨を稟け、血脈圖を授かる。歸朝の後と雖も、天台座主慈源、就いて顯密の大義を問ひ、山の法印靜明亦四種三昧觀心修行之要を問ふ。

加之、實に其の寂年

弘安三年十月十七日七十九歳寂

而も寂前二日門下普明慧曉爾性等の請に依りて、灌頂を修したる

にあらずや。此時の印信數十通藏して東福寺にあり。余先年之を展覽するを得たり。各通本文は別筆なるが多く、日附と其の下にある圓爾の二字のみ辨圓の筆なるべく、何れも一筆也。況んや「大日經見聞」並に「瑜祇經見聞」の作あるに於いてをや。

右に述べたる如く、辨圓は禪宗を傳ふる後と雖も、密教を重んじ、禪戒を説き、心印を提擲するの傍、密灌をも修せし也。當時東福寺には灌頂堂の設けありしこと、東福寺文書の「總處分」に明也。況んや、顯密の聖教を具へしに於いてをや、況んや「玉溪慧椿傳瑜伽教備中井山、至今猶行密灌」と年譜に明記あるをや。更に況んや、痴兀大慧、白雲慧曉ありて、密法を傳ふるに於てをや。之れをしも唯一時の權道方便とのみ觀るべき乎。更に詳論せんとするに先ち、門下崇福寺圓心の撰に係る年譜中より密教に關する部分を抄出して參考に資せん。

〔東福開山聖一國師年譜〕

久能山堯辯ノ
室ニ入ル
○建永元年丙寅 師五歳、母踏先言、携師登久能山、投堯辯之室下略

法華妙玄ヲ學
○建保元年癸酉學法華妙玄

止觀ヲ聽ク
○四年丙子 師十五歳、在止觀講席、講師至故四諦外別立法性、難平辯析、師乃解釋、

詞義渙然下略

文句止觀ヲ開 ○五年丁丑 師十六歲、遍閱法華文句摩訶止觀

園城寺ニ出家 ○承久元年己卯 師十八歲、慕智證遺跡入近州園城寺薙髮下略

長樂榮朝ヲ叩 ○二年癸未貞應 師二十二歲、歸園城寺、一日自思、以爲我比年學大小乘、究權實教、但

增智解而已、於生死大事、何益之有、吾聞野州長樂寺、有榮朝者釋圓、非雷傳持三部密法、

而亦受禪戒、聽教外別傳之道、智識匪遙、何滯此邪、乃出園城赴野州、就朝扣其所蘊、

久能山見西ニ密教ヲ傳フ ○元仁元年甲申 師二十三歲、歸久能山、山有見西閣梨、蘊密宗祕印、患傳法無人久矣

見師欣然全付、

壽福行勇ヲ叩 ○二年丙戌嘉祿 師二十五歲、遊相州寓壽福藏經院住持行勇莊嚴房與長樂榮朝法門伯仲也、

見師管待甚厚下略

長樂ニカヘル ○二年庚寅寬喜 師二十九歲中略○冬歸長樂寺孝事榮朝、

顯密ヲ究メ傳燈大阿闍梨位ニ登ル ○四條天皇天福元年癸巳 師三十二歲○一日侍長樂和尚之次、啓曰、某甲猥承慈接、親

聞顯密二宗、不爲無得、是故已登傳燈大阿闍梨位、然教外宗旨未領厥旨、此夙緣稍差、

願欲往宋訪尋知識伏乞慈悲、俯賜允許、乃泣下數行、長樂感其誠懇、擇曰

顯密法門ヲ條列シテ高麗王ニ上ル ○文曆元年甲午 師三十三歲○高麗國王、附貢船求法語、師條列顯密法門、以酬之、

柏庭月公ニ天 ○嘉禎元年乙未 師三十四歲○四月船出平戶津、經十寅夕、到宋明州、卽理宗端平二年

台ヲ受ケ更ニ
天台血脈ヲ授
カ

寓城景福律院、聽日公開遮之說、復入天童、見癡・絕沖、漸達都下、天竺柏庭月公、知師究性具宗、授以自撰楞嚴楞伽圓覺金剛四經疏鈔、及台宗相承之圖下略

○後嵯峨天皇寬元元年癸卯 師四十二歲中略 仁治二年七月博多ニ着ス 今年ヨリ三月前ニ當ル

延曆寺座主慈源、諮詢顯密大義○相國藤原館師東寶寺、又移居宗行私宅、相國擇日受禪

明大戒、及密宗灌頂下畧

天台座主慈源
顯密ノ大義ヲ
問フ

○二年甲辰 師四十三歲○上書徑山佛鑑、其答書曰、印上人來收書、竝前一書、及寶塔二領得、甚感不忘、弟相去阻遠、無由即答、且知自崇福遷東福、住四名刹安衆行道、殊

慰老懷、但恁麼操守、力弘此道、使一枝佛法流布於日本、真不忝爲宗乘中人也、長老禪教兼通、又能踐履、不患不殊勝、只貴始終一節、介然不改耳、此老僧望、余無他祝下略

山法印靜月止
觀ノ旨ヲ問フ

○八年辛未文永 師七十歲○三月五日、叡山法印靜明來謁、扣以四種三昧、觀心修行之要師則開佛祖爐鑪、提向上鉗鎚、煅煉相絕二待窠窟、明疑情頓息、垂淚作禮曰、我不來見和尚、爭得聞無上妙道、假使隔生、不可敢忘師恩、言訖而去、又遺弟子公深、親受指畫

下略

門下に密灌ヲ
授ク

○三年庚辰弘安 師七十九歲中略○八日月十普門慧曉爾性等乞灌頂、師選十四日定中略○其夕十五召普門等三人、行灌頂會下略 (已上抄錄)

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

東福寺建立の事情を考ふるに、光明峯寺道家、國家安寧、君臣壽福を祈らんとて、嘉禎二年四月平安城東南の地を開きて伽藍を建つ。延應元年七月初めて佛殿の柱を建て、八月五日佛殿の棟を上ぐ。寛元百年偶横嶽湛慧太宰府觀世音寺の追儼式に捉へられしを其子良實第二子に訴へしより、辨圓の德望鎮西に輝くを聞き、父子心を併せて招きしかば二月辨圓入洛す。即ち月輪別墅に居り、良實兼經、氏實、家良等歸向す。同四年、實經道家の第四子御一條殿又圓明寺殿大臣と爲りしが、佛殿未だ成らざるを以て道家普門寺を建て、辨圓の居とす。建久七年六月二日實經東福寺を慶す。辨圓五十四歳、創立より完成に至る實に二十年、辨圓を招きしは建長發願の後正に七年に當る。東福とは東大興福に取るものにして、「亞洪於東大、取盛業於興福」といへるもの之也。從て、固より禪宗の道場として始めより設計せられしに非ず。其の規模成立の事情は「聖一年譜」並に「東福紀年錄」に詳也。「年譜」に依れば、嘉禎二年創立の時、殿内に長五丈の釋迦像を安じ、左右に觀音彌勒各二丈四天王像各一丈二尺五寸を置き、釋迦の眉間に遮那像を藏む長五寸光中に五百の化身あり。五百塵點成道、五百大願、五百羅漢を教化する意を表し、之れ「開近顯遠妙旨也」と云へり。五十員の僧を置き、顯密性相大小權實の道場なりき。釋迦の大像を安置するを以て、落慶の後、世人俗に新大佛と稱す。實に建長寺建立の後也建長寺碑文に據れば建長三年建長寺建立とあり次いで文永八年法堂祖堂祠堂を造り、同十年正月法堂成る。辨圓時に七十二歳也、前後通じて三十八年にして、結構完備す。從て同一の境内には辨圓の方寸より出でざる設計もあ

るべきは勿論なり。否東福寺は元九條家月輪の別墅に代々の持佛堂などありしを、此時東福寺設計と共に、境域に包容したる形迹あるをや。請ふ試に總處分を見よ。

總處分

條々事

一、寺院

東福寺

佛殿一字 三間四面有裳層瓦葺

釋迦如來像

奉安置五大釋迦如來像一體坐像

觀音彌勒像

二丈五尺觀音彌勒像各一體

四天王像

一丈二尺四天王像各一體

講堂

法堂一字 五間四面二階瓦葺講堂是也

十八天像

北廂奉安置等身十八天像各一體

文殊像

上層奉安置八尺文殊師利像一體

十六羅漢像

等身十六羅漢一體

五百羅漢像

一尺六寸大阿羅漢五百像

樓門

二階樓門 一字五間有妻
廂瓦葺

多聞持國

奉安丈六尺多聞持國像各一體

鐘樓經藏

二階鐘樓經藏并東西廊各五箇間并

千體釋迦像

廊上層奉安置一尺六寸釋迦像千體

法性寺ノ鐘ナ
移ス

西鐘樓一口

此鐘者法性寺鐘也貞信公御息清愷公九條右丞相以下所鑄也本是顛倒無實之間所移此寺也此事粗有先規平等院鐘者本是圓城寺鐘也右大臣代公建立宇治太閤移當院用之

釋迦八相像

下層南壁奉圖繪釋迦八相像

廻廊
禪宗眞言天台
ノ祖師

東西廻廊各二十六箇間

合五十六箇間瓦葺 東西壁奉圖繪 西天廿八祖晨旦六祖並眞言八祖 天台六祖等行狀

(台密禪三宗)

僧堂 一字七間二面南北在小廂食堂是也瓦葺付九間洗面所一字

衆寮 一字三間四面瓦葺

僧堂
聖觀音像

奉安置等身聖觀音像一體

方丈

方丈 一字七間二面瓦葺付大舍堂

奉安置

諸寮

東西廊司事頭首寮二十箇間後世廂瓦葺東西各十間

庫裏

庫裏 一字九間二面瓦葺

韋駄天像

奉安置三尺韋駄天像一體

庫藏

庫藏 一字九間一面瓦葺

行者堂

行者堂一字九間無廂瓦葺

觀音像

奉安置觀音像一體

分堂

人力堂一字五間

奉安置

五重塔婆

五重塔婆一基瓦葺

五智如來像

奉安置五智如來像各一體伴塔可建立東岸上

灌頂堂

灌頂堂一字五間四面南在禮堂號莊嚴藏院

兩界曼茶羅

奉安置兩界曼茶羅各一鋪

八祖師像

八祖師像各一鋪

經藏

經藏一字三間四面瓦葺

唐本一切經二部一部五千卷一部七千卷

家祕書可納當寺者可安此經藏

寶藏

寶藏二字各三間二面瓦葺

顯宗章疏

一字 密教章疏并寶物等

密宗章疏
俗書

一字 顯宗章疏并俗書等

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

浴院一字五間二面五葺

奉安置一尺六寸須菩提一體

須菩提像

船

鍋 二口

東司

東司一字五間無廂五葺

烏瑟沙摩

奉安置烏瑟沙摩一幅

南門

南門一字五間五葺

金剛力士像

奉安置一丈二尺金剛力士各一體

供僧

供僧三口天台宗密宗

天台宗密宗

公界人百人

長老

長老一人

侍者

侍者五人

知事

知事

都寺一人 監寺一人 副司一人 維那一人 殿主一人 直歲一人

頭首

頭首

首座二人 書記一人 藏人二人 知客一人 浴主一人

修造司

修造司

行者并中間人力都合百人

寺領

寺領

九條河原菜苑小町

周防國得地上保有柳山

筑前國三奈木庄

長老一向管領印内監寺毎年相替
下向收納是大國式也子細見奥

末寺

末寺

山城國善峯寺

大和國安德寺

河内國菩提山

金剛寺

往生院

伊賀國佛土院

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

伊勢國明照寺

丹波國竹林寺

美作國勇山寺 年貢油三斗有長朝臣寄進件所等可
爲小僧祈願所之由賜政所下文也

惣社 惣社號之成 惣社就方 略中

社領 社領 略中

阿彌陀堂 最勝金剛院 阿彌陀堂一字一間四面在裝層瓦
葺號之最勝金剛院

奉安置丈六阿彌陀像一體

久安年中草創 件堂者法性寺太閤久安年中所草創也

子細見願

南北廊各六間 新造比皮葺

護摩堂 護摩堂一字 檜皮葺

北面有四足一字 瓦葺

檢校 前僧正慈源 供僧三人 山三綱三人 此中
檢校慈源山供僧三人

院領 中略

圓堂(寶光院) 圓堂一字 八角有裝層瓦
葺號之寶光院

愛染王像

奉安置丈六愛染王像一體

等身同像十七體

一寸六分同像萬體

件堂本尊安置莊嚴藏院始置不斷供養法爲御所廓內僧侶常住

前攝政(道家)

無便宜前攝政於立願始作愛染王丈六早於彼沙汰當寺坤角地模作平等院圓堂可置件等像也

僧房

僧房二字

小子房

小子房各十二間無扉

供僧東寺門人

供僧十八口以東寺門人稱之交名在別

長日不斷供養佛供燈明供僧料供米衣服宛置家領等註文在別此堂者爲子孫繁昌家門安穩所

子孫繁昌家門安穩ノ爲メ發願ス

發願也傳領子葉孫枝莫令致闕怠固如護眼睛若未進懈怠及三箇月者早改定預所可 補清廉

者努努莫違越

天竺震旦叢林ノ風ヲ模ス

右當寺者戀慕釋尊在世之遺跡欣求如來滅後之值遇奉顯五丈之聖容建立數箇之堂宇也是以

戒定慧三門眞言止觀宗門傳教ノ素願

偏模天竺震旦叢林開堂之風俗殊定置一食長齊之納僧可令受學戒定慧之三門以大小顯密戒律爲惣體以眞言止歡宗門爲專宗是傳教大師素願也、所謂安然和尚教時諍論云、夫我日本

安然ノ時教諍

國有九宗教揚已貶他未謂弘道今依佛說八宗皆道攝傳教大師所承血脈內證佛法乃有三譜、

達磨天台眞言

一達磨付法、二天台相承、三眞言血脈宗林傳列禪門付法次第次加八宗今爲九宗禪門天台眞言備此三法唯我一山印度斯那未聞斯盛者也。已加之於禪宗者慈覺智證門人尤可習學歟。卽

山王院大師教
相同異

山王院大師教相同異云問彼禪門宗爲是何家答自有其宗非一宗攝也、問其宗教相如何答未見立教相者唯如金剛般若經維摩經而爲所依以卽心是佛而爲宗以心無所著而爲業以諸法空爲義始自佛世衣鉢授受師資相承更無異途具出傳記者也、而此宗誰將來之答山上先入唐求大法師等親承此道而歸朝也、唯有安國禪院大唐義空和尚自其宗人也彼入室弟子源譜禪師面受得之也文而近來稱入理之輩粗聞於天下以惡無礙教之諸宗驚成毀誠以不可也如師子

入唐諸師禪宗
ヲ傳フ
義空源譜

身中虫喰師子肉立自宗損自宗何爲何爲古德云乃有束教者不知佛之微旨妙在乎言外語禪者不諒佛之所詮槩見乎發內雖一圓顛方服之寓而紛然自相是非如此者古今何嘗消息能識哉此言莫言莫言兼又不可受十方檀那之施利永可絕綱位公請之希望只以發心修行菩提涅槃可爲聖僧中規式委在別番然則以箇庄園永以施入之雖宗之長者不可自專雖寺之攝檢檢校不可相交唯可在長老之管領於此地者不可宛催大嘗會造內裏役夫工以下勅事宗之長者奏請公家早可令免除亦不可有守護地頭之煩前亞相誠子孫必可令停止之後代執柄雖誰人爲老僧之末葉者不可背此制當時將軍雖未來爲亞相之後胤者不可違此誠抑以三奈木庄地利可宛住侶之資糧於恒例佛事者可省宛家領傳領云人殊可有尋沙汰歟以上得地保祐可宛修理料但米作

事等甚多爲宗長人仰合圖爾上人漸漸可被勵土木及子孫營父願是舊觀也於衣服者可爲長老之宸是宋朝之風俗也於瓦者木津辯海所領關東沒官卽寄附當寺仍每年可燒進瓦二千枚云云

鎮護國家ノ道
隨到來運置可宛修理凡一寺之事長老掌行之外有奏公家訴關東子細者申長者可請彼處分以此寺先奉朝廷爲鎮護國之道場也次家長者以下子孫可守護之譬如守眼睛此寺與復者我家可繁昌此寺衰微者一門可陟遲歟莫違犯三寶諸天可證明者也中略

觀音堂(普門院) 觀音堂號之普門院 中略

報恩院 中略

光明峯寺 中略

予依手振假他筆寫守此狀努力々々不可違犯

建長二年十一月日愚老在御判下

東福寺とは夫れ如此複雑なるものなり。先づ東福の本寺に就いていはんに。

(一)東西廻廊の壁に西天二十八祖震旦六祖(以上禪宗)眞言八祖天台六祖の行狀を描けり。

(二)灌頂堂ありて、兩界曼荼羅並に眞言八祖像を安置せり。

(三)寶藏には顯密の章疏を藏せり。

(四)供僧三口は天台宗と密宗との定なり。

次に謂はゆる東福寺なるものが、藤氏歴代の持佛堂別墅等を包容攝取して成立したるものなることは、
 久安六年十一月二十六日同院を御祈願所と爲す。太政官符に依れば、
從一位藤原朝臣宗子所被建立也」とあり 久安六年十一月二十六日同院を御祈願所と爲す。太政官符に依れば、
續き 若くは「官符に准后」にあるを以て知るべき也。前者は法性寺關白官符に准后

四至 東限山科境 南限蘆坂南谷 西限河原 北限貞信公墓所山

と見え、護摩堂ありて、檢校は山僧慈源、供僧は山僧三人とあり、其他報恩院ありて供僧山一口、寺一口、念佛衆六口「故禪閣終老地也」家道とあり。光明峯寺あり。「模高野舊儀企創者也」とあるものにして、大日、觀音、愛染、不動已上兩界曼荼羅、眞言八祖像已上大日及四佛已上多寶塔高野大塔を模す 弘法大師影經卷、儀軌、五鈷等已上影堂あり。而して、

供僧

金堂 二口 御塔 二口

御影堂 二口 奥院 二口

已上東寺眞言宗撰器可補之中略

とあり是實に圓明寺殿實家さいひ道の第四子が「小僧可終老地也」とて經營する處也。東福寺の成立豈單純ならんや。而して戒定慧の三門を受學し、「以大小顯密戒爲惣體、以眞言止觀宗門爲專門」といへるは建仁寺の台密禪三宗と同じ。東福寺の成立豈に單純ならむや。藤氏歴代信仰の表現的營造物もあるべ

く、道家、實經の信仰の象徴的建物もあるべく、辨圓自身の計畫もあるべし。故に東福寺の建造物のみを以て、辨圓の信仰乃至精神を描摩臆断するは余の與せざるところ也。必ずや、他の傍證を得て論断すべきものと思はるゝ也。何となれば、普門寺の如きは「以首楞嚴經觀音圓通法門可爲所學」道場なれば也。

辨圓の密教に關する代表作は「大日經見聞」と「瑜祇經見聞」也。二書寫本にて傳はり、余の知るところにては、前者は現に東福寺に一本、建仁寺兩足院に一本、尾州眞福寺に二本あり。眞福寺本は紙本十冊にして、一本第一卷の表紙に、

文永九年聖一國師談義良賢

とありて、卷首に、

書本者文永九年(六百三十八年)十月三十日於東福寺方丈始之干時 宰相已講之云々 教王經開題云五智十六智及三十七智乃至塵數佛智斯乃一佛衆生之德也文

卷末に

右見聞者東福寺開山國師御談義前東福佛通禪師御自筆之本也 正中二年(五百八十五年)乙丑之曆六月二日書寫之 卽一交了正本伊勢國多氣郡上野御園安養寺開山塔頭經苑被納之云々 沙門釋能信
干時延文元年(五百五十三年)六月一日於尾州眞福寺花藏坊書寫之佛法爲弘通也

とあり。建仁寺本は七冊にして、第一冊の中に云く。住心品上の奥書也

住心品見聞上

右見聞者東福開山國師御談義前住東福佛通禪師御自筆之本也云々

正中二年乙丑之曆六月二日書寫之即一交了、正本伊勢多氣郡上野御園安養寺開山塔頭經藏被納之

云々

至徳元年六月四日於寶生院書寫了

廣 範

書本云

文永九年十月六日於東福寺方丈午時始之宰相已講發起之云々

第一冊の奥に住心品見聞下の奥書也

本云文永九年十月二十日畢

十四反化初初禪 化初禪欲界化二禪 化等也

右見聞者東福開山國師御談義前住東福佛通禪師御自筆之本也云々

正中二年乙丑之曆六月十三日書寫之即一交了

沙門釋能信 卅五

至徳元年六月十一日於寶生院書寫之

廣 範 卅八

第二冊の奥に、

正中二年乙丑之曆七月二十九日書寫之

沙門釋寂法

第三冊の奥に、

右見聞者東福開山國師御談義前往東福佛通禪師御自筆之本也云々

正中二年乙丑曆八月十八日書寫之即一交畢正本伊勢國多氣郡上野御菌安養寺開山塔頭經藏被納之云々

第七冊の奥に、

右見聞者東福開山國師御談義前往東福佛通禪師御自筆之本也云々

正中二年乙丑之曆八月二十八日書寫畢即一交畢正本伊勢國多氣郡上野御菌安養寺開山塔頭經藏被

納之云々

其内譯は、

第一冊 住心品見聞上、下

第二冊 具緣品見聞上、卷頭二上ト
アリテ下見エズ

第三冊 息障品見聞、普通眞言藏品見聞、世間成就品見聞、悉地出現品見聞

第四冊 成就悉地品見聞、轉字輪曼荼羅行品見聞、密印品見聞、字輪品見聞、祕密曼荼羅品見聞

第五冊 入祕密曼荼羅法品見聞、入祕密曼荼羅位品、祕密八印品、持明禁戒品、阿闍梨眞實智品

見聞、布字品見聞、受方便學處品見聞

第六冊 說百字生品見聞、百字果相應品見聞、百字位成品見聞、百字成就持誦品見聞

第七冊 百字真言法品見聞、菩提性品見聞、三三昧耶品見聞、如來品見聞、護摩品見聞、本尊三

昧品見聞、無相三昧品見聞、世出世持誦品見聞、囑累品見聞

瑜祇經見聞一冊は寫本にて傳はり、左の如き與書ありて、其由來を物語れり。

于時嘉曆二年歲次丁卯二月二十四日時正初日、於伊勢國安東郡安濃津無量壽寺方丈傳受校合畢、

師云、此見聞先師佛道禪師大和尚面授于東福開山聖一國師之本也、然間南山北嶺兩流大事相交被

口決之、縱雖爲師範、無愚僧之免、而不可令妄書寫傳授、何況於非涉器付囑弟子于、穴賢々々可

慎也、

文永十一年三月二十五日始也

筑前承天寺に、紙本墨書の祕密灌頂作法一幅あり。朱印三個を捺す。日附に依れば、普門、慧曉等の受灌せし弘安三年十月十五日とあり。本文に曰く、

灌頂作法

堂内作法曼荼羅南面胎東金西懸師北面弟子又同闕伽一前佛供三环街明二环以壇一面机二前上中

置瓶一口如散杖若灑水器用之又道具有密印了先神線受者左肘入萬行貫構義也

次辟釧左腕入 次腰釧 從右順廻齊前

次次金鐔左右目加持

先表白隨時 次神分 次作法在別 次引入弟子在別

私云此灌頂密印以無所不至印爲兩部通三身印眞言三種悉地從應身眞言誦之

弘安三年庚辰十月十五日

尙承天寺は辨圓の開くところなること、前述の如くにして、「臥雲日伴錄」康正三年四月にも左の記事あるが如く、白雲慧曉も住したれば、此軸も傳はりしなるべし、「臥雲日伴錄」に曰く、

十七日、雲章來中略筑前承天寺、乃東福開山歸朝時、最初建立、後讓之白雲、白雲讓之耕叟下略同寺藏「諸軸讚語之認」に依りて、承天寺歷代を表すれば左の如し。

圓爾辨圓¹—鐵牛圓心²—寂菴上昭³—白雲慧曉⁴—耕叟仙原⁵—山叟慧雲⁶—藏山順空⁷—無爲昭元⁸—直翁智侃¹⁰—南山士雲¹¹—潛溪處謙¹²—無等以倫下略

何れも聖一門下にして、僅に寂菴上昭と無等以倫とが榮西門葉たる黃龍派たる也。本篇の當寺に傳はる決して偶然にあらざるを知るに足らん。更に左の文書を見よ。

承天寺住持職事自門徒中可相斗之由被仰出處背其旨條希代所行也所詮向後就豪舉令競處仁者下向入寺上仁別爲寺用伍十貫文致沙汰可償其咎之由住持並諸東堂以評議所定置如件

應永十九年三月九日

住持聖悟

(花押) 已下九人の
筆署略す

青蓮院吉水藏に、辨圓の印信一通、慧曉の離作業切紙一通を藏す。俱に弘安三年十月十三日の日附あり。

辨圓並に其の門下の密教思潮を考ふるに、頗る重要なるものなれば、左に全文を掲げん。辨圓の印信に曰く、

下 受者御所

右略出經文説云諸供養當施貧不應去狗鳴等食噉所有財物阿闍梨取隨意受用若不能用當施三寶傘拂等施佛塗香燒香等施法花瓶器等施佛及四方僧若無僧當去七衆去弟子乃至少分不得用之若用之犯三昧耶云々者則任經文可分去之狀如件

弘安三年庚辰十月十三日傳燈大阿闍梨位圓爾

離作業切紙に云く。

離作業齒木事

三昧耶戒齒木向身一度得之上成熟相也

投花事

一度得遍照金剛

此卽金剛薩埵冥加塵點劫福力也

弘安三年庚辰十月十三日 慧曉記之

尙辨圓の將來せる書籍の中には、台宗十類因革論を始め、天台部に屬するもの少なからず。又寂後應永二十六年、諦觀の四教儀を開版して常樂庵に施入する等、亦這般の消息を徴すべきものあり。四教儀の刊記に曰く、

高麗觀師四教儀其文約其義豐天撈妙旨罄無不盡
本朝版行既久然未見列段分科之者不能無憾
丹州比丘祖芳偶獲科本命工鏤版捨常樂菴莊嚴
聖一國師品位所冀文義無凝禪教雙忘入一心之玄門證三德之祕藏
應永己亥春王正月前天龍岐陽方秀謹志

辨圓の門下多士濟々たり。「年譜」に出す處左の如し。

東山湛照房

○備中州人、東福庵、又叡三聖萬壽兩寺、滅後得舍利、證寶覺禪師

無關普門房

○信州人、入宋見倫斷橋、文應帝離宮有妖、門厭之、仍爲南禪第一祖、證大明國師

白雲慧曉房

○讃州人、入宋參曇希叟、曇舉百丈撥火公案、於是豁然有省、證佛照禪師、有語錄

山叟慧雲房

○武州人、入宋問倫斷橋祖師西來意、於是賦墨梅頌、倫印可、證佛智禪師

藏山順空無量房 ○入宋依磬石林、諡圓鑑國師

無外爾然 ○洛城人、入宋訪尋知識、師臨終囑曰、正法眼藏、付囑爾然、諡應通禪師

無爲昭元 ○洛城人、火浴流設利、諡大智海禪師

月船琛海十乘房 ○播陽人、受密灌、弘於野州、諡法照禪師

癡兀大慧平等房 ○勢州人、有十牛訣、枯木集、行于世、諡佛通禪師

直翁智侃正智房 ○上野州人、初參隆蘭溪、入宋、然後嗣法於師、諡佛印禪師

奇山圓然定智房 ○駿州久能人、師之姪也、久侍巾篋、後終普門院

南山士雲 ○遠州人、有語錄

雙峰宗源 ○雙峯初名逢原、後改定源、筑前州人、工傷頌、勅諡雙峰國師

潛溪處謙 ○武州人、元應帝親受密灌、竝衣孟、特賜普圓國師

東州至道 ○嘗在大元國大都、勅大覺寺

玉溪慧椿 ○傳瑜伽教備中井山、至今猶行密灌

無住道曉一圓房 ○在尾州長母寺、有沙石集、聖財集行于世

妙翁弘立 ○讚州人、勅道福寺

外に鉄牛圓心、耕叟仙原、天柱宗昊、神子睿尊、横嶽湛慧等あり。今辨圓門葉の密教として説く

べきもの多々あらんも、先づ痴兀大慧と白雲慧曉とを説く可し。

痴兀大慧は勢州の人、始め密を修し、辨圓を詰り、屈して禪を修む。伊勢に安養大福二寺を開く

正和元年十一月寂す大慈菴佛通
禪師行狀註釋摩訶衍論、十牛訣、枯木集、法華要抄等有著す。「大日經見聞」は

其の筆録するところ、密法は平等義と稱せられしといふ。白雲慧曉は讃岐の人、十七歳にして出家

し、二十五歳にして泉涌寺明觀に律を學ぶ。文應元年辨圓に歸す佛照禪
師塔銘「是歳泉涌寺慧曉慕師道而

至、問修行心要、師便運筆畫一圓相、書其下云、無内無外、孤圓一輪、忘光忘影、諸聖出身聖一
年譜と

あるもの之也。殊に密教に心を傾け、弘安三年十月十五日密灌を受く。其著に、由迷能起、白雲和

尙法語あり。由迷能起中密教思想を顯せるものを左に抄出すべし。由迷能起は「永仁二年春王二月

八日記之」奥
書とありて、假名法語なり。「莊子」等を引きて、人は元來自性なきも、迷ひに由りて、

種々の相を起すことを説けり。

抑佛此大乘無上ノ法門ヲ、一ノ阿字ニ歸入シ給フ、故ニ開ケハ、多ノ法門トナレトモ、ツ、ムレ

バ一阿字也。大日經ノ疏ニ、阿字ハ即本不生、不可得空也、普攝ス一切ノ佛法ヲ、此空ヲ以、加

持力ニヨルカ故ニ、能攝テ一切法ヲ成スル也文、阿字、有色形、有聲義、或時ハ文字ノ色形ニ、

心ヲ安シ、或時ハ聲ニテモ誦シ、閑ナラン時義ヲモ念ヒツ、ケハ、無上ノ理ニ住セン、程アルマ

シキ事也、南無阿彌陀佛ト唱フルハ、猶文字モ多シテ、マキル、モ有ヌヘシ、口ヲ開ハ自ラ出息

ハ阿ノ聲トナル、故ニイカナルマキレノ中ニモ、此行程ハ易カルヘキ事ハ侍ヘラシ、百千ノ經論ニ、所説ノ法門モ、皆此一字ニ攝ル、故ニ一聲ナレトモ、一切經ヲヨム功德ト同シカルヘシ、又先ニ申ツル法門トモハ、皆此字ノ義ナル故ニ、何トモ知ラテ、誦ル功德タニモ、ヲビタ、シキ事也、マシテ一念ナリトモ、無生ノ理ヲ信シテ、此一字ヲ持クラン功德ハ、無量劫ヲ經トモ、難説盡見ヘ侍ル、サレハ最後臨終ノ時ニモ、只口ヲ開キ、阿ノ息ノ上ニ、念ヲ置テ終ヲ取ルヘシ、其時ハコトモキワマル故ニ、何ニト思ヒテ、メクラスニ及ヘカラス、中ニ義ヲ思ハントセンニハ障トモナリヌヘシ、只様モナク一ノ阿ノ字ニテ終ランニハ、無念自證ニカナヒヌヘシ

辨圓門葉の密教を論じて此に至れば、鎌倉時代末期の殿將として、虎關師鍊を逸すること能はざる也。彼は京都の人、八歳にして東山湛照の門に入り、遂に嗣法となる。即ち辨圓の法孫也。彼れ文筆に秀で、内典外典通せざるなし。後、寧一山に師事し、著す處甚多し。「海藏紀年録」に依れば左の如し。

楞伽箋釋

聚分韻略

宗門十勝論

濟北集十四

文應皇帝外記

濟北集十

元亨釋書

禪儀外文集

和漢編年干支合圖

病儀論

濟北集十四

正修論

禪戒軌

心論

佛語心論

十禪支録 慧日語録 編輯セルモノ聖一國師語録ナリ

日本禪林撰述書目には右になきもの六部あり。

濟北集 詩文集二十卷 海藏紀年録 門弟令淬編師鍊ノ作ニアラズ

紙衣膽 禪餘或問

宗門十勝論 濟北集十四 五家辨 濟北集九

彼は禪宗を舉揚せしにも拘らず。少くして、仁和廣澤の密を稟承し、悉曇灌頂鈍翁を受け、夢中に傳教慈覺に受くる所あり。輪供三十を修し、密符を受け四十密法を修せし六十五歳こと一再ならず。自ら其靈驗を信じて、人をして勸めて修せしめき。令淬云く、「修密之間、辟穀絶言者斑々在焉」と。餘年門弟が親しく記す處の年譜を見よ。

〔海藏和尚紀年録〕門人令淬編

○八年乙酉弘安師八歲中略遂以珍珍藏主爲紹介投實覺東山湛照下略

○十年丁亥弘安師十歲春祝髮、夏四月八受戒叡山下略

○五年丁酉永上仁略居頃之建仁寺適仁和寺稟廣澤之密旨

仁和ニ廣澤流ノ密ヲ受ク
醍醐ニ實賢ノ密ヲ探ル
○二年甲辰嘉元師二十歲冬游醍醐寺探實賢師之密派下略

澄春ニ悉曇ヲ鈍翁ニ灌頂ナシ
○應長元年辛亥師三十四歲夏四月駿州有乘澄僧正之徒僧都澄春者、善悉曇、師往問焉中略

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

受ク

秋就州駿之願鈍翁受灌頂位、翁即東福佛通之高足也略下

○正和元年壬子師三十五歲、春在建長寺略中秋七月八夜、師苦殘暑困甚夢寐中一高僧授師

夢中傳教ニ印
信ヲ受ク

傳法印信一卷、曰、子知吾乎、師曰、吾弗知也。其僧自謂吾傳教大師也、寤而怪焉略中

日夜又夢師與亡父小浴、一僧自傍俄爾出來問師所在而拜之、師夢中以謂以余有虛名於

江湖乎、傍人指而謂之慈覺大師也、略中乃自言、師錄大師化去久矣、何故至此、對曰我不曾

化、今適定起而至耳、師曰、其定爲何所、大師備言之、師爲未聞之所也、覺而遺其名、

師大欣解後大師目不暫捨、欲從而問密學之奧旨、然以先相勞苦而未敢輒發也、傍僧

數人喁々致問、師猶心反之、徐問曰、余指節龜硬、手不能結轉法輪寶、爲之如何、大師

曰未知之何又不妨耳中師意謂悉曇之學、頃者有不通處、今賴值大師無餘蘊耳、惜乎圓智

不在也智蓋印之密
學之同裏也略下

輪供ヲ修ス
○五年丙辰正和師三十九歲中略秋八月修輪供、領於其二十七日浴身淨衣辨備支法、明日夜師

夢、師因旅行投一家、見窓几上以盆盛肉、即而眎之有兩種、一者塊然、一者蜿蜒、然

共皆鮮赤、有一人曰、子盍食之、師心頗訝之、而不獲已竟、攬其塊然者茹之乃塞口喉之

間稍自化下、無復滯礙、客亦在側曰、子所吞者何也、又彼蜿蜒者爲何乎、師云塊然而爲

余吞者爲大聖歡喜天又其蜿蜒者羽嘉神也、語已俄寤、時聽微鐘聲、出戶見天、四無片雲

衆星璨々師獨感怪而已略下

○二年戊午文保師四十一歲、秋七月至本覺、冬十月有一夫、以疾請見師見夫叙曰、某不幸

縈惡疾、百方竭矣、用是期之以七日、禱爾藥師佛于良田前夕期將填、倏然引眠、夢藥師

密符ヲ受ケ 佛誨之曰、去此不遠、西有一禪舍、女其行矣、屬其主索密符而吞、女病事可除醒而祥夢

是踐師其無謂某妄敢見乖恩庇幸孰大焉、師遂書而付焉、其夫忻受而拜辭、莫知所往略下

密法ヲ修シテ
妖ヲ攘フ

○元亨元年辛酉師四十四歲、春二月修密法于椎山古寺略下

○四年辛巳曆應師六十四歲略下十有二月、公九條道敏爲先相經忠所訟事方丞、蓋經忠降吉野時有

權倖之掖、而神之者公告之師曰、事急有何法能轉禍耶、師曰密有之曰、新其舍立其壇而

修其法者難必抒矣、公如言除日工告成

護摩法ヲ修ス ○康永元年壬午師六十五歲、春正月爲陽明公修護摩法凡二七日得應也略下

夫れ如此。臨終の夕尙門下に灌頂を授くるを辭せざりし辨圓の血は正しく此に流るゝにあらずや。

尤も彼と雖も、禪衣を被て、祖師禪を提唱す、故に楞伽を註し佛語心論十勝論を草し、正旁論を作る。

十勝論に云く、
〔濟北集〕十一宗門十勝論

禪講二人、相遇忻々酬酢、言語交馳主賓講者問曰、世之言佛者、以宗門稱禪、不敢呼教何、禪者

答曰、禪者爲如來一代之宗法、故世稱之、教門無之、故不呼也。曰、教豈非宗法乎、曰、爾、只是公私之異耳、曰、敢問曰、天台雜華建干支那、寧非私乎、三論者題目自見、唯識雖稟補處、是無著天親之私建也、律出世尊而爲小儀、唐宣會大亦陷私建密立毘盧不免感授、唯我禪門、婆伽直下受授嫡聯、故爲一代公傳宗門之號不亦宜乎、豈他氏所得稱哉。然我宗門離言說相、非思議境、上根大機唯證卽知、我且摘見行化迹他氏之所不及以語汝、汝其聽諸、一曰、竺乾正續、二曰、達磨位高、三曰、祖名通呼、四曰、派流廣大、五曰、識記邈遠、六曰、墳典收藏、七曰、規矩嚴整、八曰、王臣多人、九曰、應化幽贊、十曰、他家推稱略下、

正旁論は密家に對する見識を披瀝せり。云く、

〔濟北集〕十五 正旁論

講者曰、子以禪門二十八祖爲正傳、指諸教家爲旁傳、諸家且置、如密宗毘盧直下系稟明皎、寧爲旁乎、以毘盧視釋迦、毘盧爲正、釋迦以旁、予曰、子未委二佛、故有斯惑、我詳言之、佛法中有三乘教、一乘教、一乘教者三身融卽、三乘教者、三身隔別、子之所言者三乘之談也、今之所立者一乘說也、子舍隔別見融卽焉、又我法中有身授、感授爲末、身授爲本、四七之付法者身授也、密傳感授也、感授者聖凡多矣、身授者四七而已、故立身授爲正、曰二受如何、曰、如來生身授弟子生身、乃至後世生身授受是身授也、如來化身授弟子化身、乃至諸感應是感授也、生身只一而已、謂

二十八祖也、感授者常人多有、故不齒焉、曰、如何化身授定身、曰、金剛薩埵授龍樹是也、曰、金剛薩埵法身大士、直授龍樹生身、何言化定、曰、龍猛先持毘盧遮那真言、然後繞鐵塔七日、加白芥子打塔戶、塔戶便開入中受金剛薩埵祕授是所謂感授也、蓋釋迦入滅至此時七百年、夫法身如來出色究竟處、應身如來出閻浮提、閻浮提有歲月、色究竟無時分處、難定授受、有歲月處授受有定、故以密傳爲感授、又薩埵實法身、然赴感應、故云化身、龍樹亦是生身、然受感者、定心身時也、凡人散心時、不得感應、定心身時得感應、龍猛大士持誦定身得感授、故云定身、曰、釋迦說顯教了入涅槃、然後毘盧說密教授薩埵、々々授龍樹、二佛差殊應有二、正何云密旁、曰是密徒不學之過也、世無二佛、國無二主釋迦毘盧一尊也、法體云毘盧、應體云釋迦、名字有二、其體一也、應佛示涅槃、法佛無滅度、是以密教似涅槃後說、然真佛說只是一時、曰、子毘盧法身釋迦應身、何故毘盧爲旁、釋迦爲正、曰是前所三乘一乘之差也、子猶言之乎、又我貴生身者、衆生皆見法身者不能普見、若佛感加便得見、然其見有淺深、常人專注者、雖婦兒、猶有感見、今龍樹之見者深者也、凡人之見者淺者也、淺深有異、感應是同、龍樹寧容議乎、我只、以密傳似凡庸感授屢寄議焉、亦恐浮矯之類以善境界、爲眞法立傳授、曰、龍樹之前無密教、薩埵之後密教始、故西天名爲龍樹宗、子何與釋迦教一合乎、曰印度無有密教、而宗號立後世、子云、龍樹前無密教者宗號也、蓋龍猛時、佛經多亡、惡王信邪、六師徒盛、龍猛受佛起伏邪徒、入海見經、誦憶而歸、如來

正法此時反淳、以故龍勝得金剛感授密教自此繁衍、竺士以興龍勝云龍樹宗、猶如台教雖始慧文、與智者故、世云天台宗、雜華雖基杜順、興康藏、故云賢首宗、曰、釋迦說顯教、毘盧說密教、密教勝故法佛說之、顯教劣故應身說之、如子所言、雖一佛如勝劣、何、若言勝劣、正旁似乖、曰、是又前三乘之謂也、蓋世尊出惡世、々々衆生不能直見法身、先以應身調熟諸機然後隨根卽示法身經曰、如來安居初利天九十日、閻浮人不久見佛、渴仰尤甚、逮佛歸閻浮、諸天設三道寶階、人民集階下、欲見如來、有蓮華色比丘尼、女身故當居後見佛、尼欲先見化作輪王、千子具足、寂初見佛、佛呵言、汝雖見我色身、不見法身、須菩提宴座石室、渠見我法身、是等文顯經多在、不暇繁出、大凡顯密三身說法、語心論記通衡等多有、檢彼乎。

釋迦大日一體說を立て、感授身授の目を以て正旁を判す、禪家より觀たる密教を伺ふには屈竟の資料也。彼は又二十八祖を擁護するに甚だ急也。左の文を見よ。

〔濟北集〕^{十八}
通衡之三

宋仁宗皇祐間、講徒有誣禪門二十八祖絕師子者、蓋承干唐北山神清也、明教大師崇公著正宗記、上仁宗、然後二十八祖系連明皎干因撰釋書、博見本朝古書、有傳教門人光定所撰、一心傳戒三卷此書明台教圓頓戒、和漢流傳所由、其下卷曰、然則有天竺付戒、二十八師、彼二十八師菩提達磨持一乘戒遊來漢魏中略舉國知聖云々、今台戒所立、雖羅什相承靈山感授、唯以達磨所傳爲正、蓋

南嶽思大得達磨戒、智者因而立圓頓大戒、欲明其紹承故、定師詳載達磨事、定師聞于澄公、々々聞于唐國、二師所聞與傳燈正宗記合、澄公游唐者、貞元之末也、嵩公宗記者皇祐之後也、相距者二百四十餘年、因此而言傳教所聞、明教所記如合符契、皇祐講徒何不知乎、曰、講徒所嫌者禪者之說也、澄公所承亦禪者也、寧非黨乎、曰不爾、澄之所聞者戒學也、嵩之所記心學也、達磨之所傳分爲兩派、雖心戒異、祖紹是同、講徒易寡聞乎、曰、講徒或疑達磨、曰天竺三藏入支那者、或譯經論、或立宗教、其所演唱漢人不疑、何獨達磨有此事哉、況達之異迹如此顯著乎、曰講徒因付法藏傳耳、曰盡信書不如無書、吾於武成取二三策而已矣、講徒何不及外儒哉。

尙智證の禪學の教相を解するを難して云く、

智證大師教相同異曰、禪宗教相如何、答唯以金剛般若維摩經爲所依、以卽心是佛而爲宗、以心無所著而爲業、以諸法空而爲義始自佛世衣鉢授受、師々相承更無異途、嗚呼珍公何不思自語相乖哉。已言自佛世衣鉢授受師々相承、何還以維摩金剛爲所依乎、諸宗各有所依、將以爲禪門亦有所依乎、蓋三論依中百門也、法相者依楞伽深密及唯識也、天台者依法華也、賢首依華嚴也、此諸宗依於經論者宜也矣、何者像法諸師取經論意立宗也、我禪門不然、如來命飲光傳心印、爾來師々衣鉢授受以爲法信、何暇求所依而取金剛維摩乎、若有所依非佛心宗、珍公不聽禪宗、比擬諸宗、臆教分別出所依者實可笑也、然彼遊支那、學台密二教、其授受之跡違鏜之者鮮、至禪門不遑研究故有此誤

略下

と而も彼は眞言八祖並に台密諸師の贊を作りぬ。

〔濟北集〕五
偈贊之一

龍 猛 密教八祖

如來法寶散如灰 聚者可諸此臣魁 試看手頭些芥子 金剛關鍵一敲開

龍 智

菴沒羅林持呪仙 那伽曷樹有眞傳 南山尙聽南天化 何啻靈齡八百年

金 剛 智

自從游化辨堅心 葱嶺不高沙不深 君見密雲彌布處 俱抵開目旱天霖

善 無 畏

毘盧正印大虛彰 和夢胡僧八大唐 甘蔗苗遣甘露在 竺支灌遍又扶桑

不 空

寧馨胡子氣如虹 貌國鯨波問祖翁 要識折衝千里外 安西城角北之東

一 行

萬里西川香合開 七星北斗臭猪廻 毘盧經卷盤根節 鈷利筆鋒分折來

慧果

龍孫之種自天駒 妙歲摩醯遭逐驅 付託從來萬鈞里 纔終授受卽終驅

弘法

聖賢應世數元存 南山生緣南印源 頭上寶冠卽身佛 諸師自是豎降幡

道派青龍出大唐 五瓶水澗窄滄浪 髮長衣弊那伽定 借路花胥謁后皇

劍落大瀧峯 杵懸高野松 旱天霖雨走 瓶外有真龍已上八祖

傳教

汎彼扁舟入大唐 祖師懸識契符同 直將土石成銀地 卽假卽空亦卽中

法全

青龍之子甲鱗鮮 善起風雷頭角全 龍窟由來有龍種 後先乳出兩蜿蜒

慈覺

瓜片送來忉利宮 洋中緩受兩般風 久聞奏火見唐火 古有易東今法東

諄々夢寢苦相催 一幅風帆萬里開 五頂山中見師子 扶桑國裏幻樓臺

覆屋慶雲嶽降時 問津不怕海濤危 要智臺嶺有爲處 萬歲皇國一總持

智證

法鼓震搖四百州 金人元不怕流求 靈區那識有前定 寺裏省中双白頭

安 然

舌端覆偏五天門 自是聲名溢海寰 一教一時兼一佛 斯言百世不容刪

覺 超

過鼻紅蓮相舌長 冷胸白月觀心成 六丁當日不收盡 密句臺詞滿篋籙

皇 慶

等閑印手震坤維 檣上靈鳩去有時 商令不行童子盡 一言有宥駟難追

聖 寶

顯紀密綱能自持 生緣同祖智過師 五貌三鈷一如意 吼動毗耶無息時

日本天臺の大成者、四一十門の説者眞言宗教時間答安然を賛して、「斯言百世不可刪」といふが如き、而して自ら老境に及ぶ迄密法を修するが如き、何ぞ「十勝」、「正旁」の言の峻烈なるに似ざるや。虎關肚子裏の一密塊鎖了し去らんとして銷了し去る能はざるものあるにあらずんば、焉ぞ如此ならんや。令淬記して云く。「嘗從容謂徒曰、吾自幼旁涉儒典、宗貫乃顯密、皆有以也、若等唯究心祖宗則庶焉、不則非吾徒也」紀年と録。「皆有以」とは果して何ぞ。

(參攷)

〔濟北集〕十六
通衡之一

講者曰、子以楞伽爲法身說、教門法身無相無說恐似大乖焉、又密者言、法身佛說密經、報化身說顯經、楞伽非密經、何法說之有、予笑曰、言說之惑人者尙矣、子者尙之甚者乎、法身無說法者權教之談也非實說也、法身不說顯經者、密徒之言也、非道理也、又子肯密者法說向之無相、自破無說無相已破何疑楞伽之法說哉、夫顯密之二輪也、初無高下、應顯機而說顯經、應密機而說密經、蓋證悟有淺深、故法理似有高下、淺深者雖在機、高下者不在法、又夫如來出世欲令一切有情咸聞法說而諸有情業障深重、根機萬品、如來欲調熟故、有三身說、所謂對外凡二乘三賢故有應身說、對十地故有報身說、對內證眷屬故有法身說、維摩思益彈斥之後般若法華調熟之間、人天異生根利之者、踰階差撤隔歷、三身融會五乘通合、此時如來開法身境演圓極理、無復前時差異下略

〔濟北集〕十六
通衡之一

密經之法說者、毘盧遮那加持經等也、報說者、金剛頂十八會、指歸云、金剛頂經瑜伽有十八會、初會名一切如來真實攝教王、有四大品、一名金剛界、有六曼荼羅、所謂金剛界大曼荼羅、并說毗盧遮那佛受用身、以五相現成正覺、成佛後以金剛三摩地、現發生三十七智、應說曼荼羅儀則、爲弟子受速證菩提地法、是指歸不空三藏譯、已言毘盧遮那佛受用身、是經爲報說焉、應說者又指揮云、云後示釋迦牟尼佛降於閻浮提、變化身八相成道、皆是普賢菩薩幻化、一切如來還以一百八

名讚揚金剛薩埵、如是第一會、今案濟字教王經有此事、廻字教王經湖本無此品、此品者一切義成就品也、然則金剛頂十八會、第一會中有釋迦八相事、寧非密部應身說乎、其餘顯密諸經、三身說相、不暇枚舉、今出少分耳、願開學者開此眼乎

〔濟北集〕十八通衡之三

上略然吾佛經右膝長跪共見者其又有說、凡人之體右尊左卑、先以尊者呈其儀、是祖右肩著右膝也、又右左者象定惠故、請問之士問惠右膝著地、問定長跪者假女儀也、是表惠之表相也、而又惠中有定、定中有惠、混淆交互微旨難辨下略

〔禪餘或問〕上

密嚴經者如來住密嚴國而說、夫密嚴國者出過欲色無色、內證之境、自性法身之所住也、故經曰、譬如星月等依須彌運行、諸識亦復然、恒依賴耶轉、當知賴耶識即名爲密嚴、毗盧境界身土不二、此文爲證、此經豈非法身說乎、故經曰、爾時金剛藏菩薩三十二相八十種好莊嚴其身、爲欲宣示無分別離分別先佛法眼如師子王、普觀衆會、口無言說、以本願力、於其身上眉額頂鼻乃至肩膝、猶如變化、自然而出如是之音、爲諸大衆演說法眼、案大日經、如來口無言說、身上支分出法音、與密嚴同、顯密雖異、法佛境界相似不異

〔禪餘或問〕上

釋摩訶衍論真如用大章曰、謂法應化三身及實々假々之二理平等一體無差別故、自本身及枝末身平等一體無差別、故佛性論第三曰、想稱正行是各方便、由此方便是故法身可知可見、譬如由他心通故則能得見出世聖心、釋曰、他心通者有三種因緣、所謂兩是方便、一是正道、方便二者一由天耳二由天眼、能見他內心、孔中有水、水相若黑則知癡生、黃則知貪、赤則知瞋、白則知善、見縹色時知是無記、因耳目方便故比知他心、次正道者欲得他心通、須緣自心、以現在心觀過去心、何以故可追緣故、從遠至近次第向後、初觀無量念、漸々至一刹那、乃至滅刹那心、觀中得自在、然後取前人心、作自境界、修觀行先想觀前人身相具足、如是遣拆除皮肉骨、唯餘心在、緣其人心、隨其利鈍奢促皆能得見如他聖心、過六根境亦能得見如來法身、亦復如是、非六識見、方便正行二種行故可得能見、

〔禪餘或問〕上

或問、語心論二種神力分云一分諸佛現授三密祕密加持、又云證二種、一顯二密、其云顯者莊嚴經中金剛藏說初地法門、其密者是金剛頂經十六菩薩十地修行金剛薩埵配當初地、今考魏唐二譯本、無密乘句、放知楞山不說密教、何加虛釋、答大藏中家字函內有佛說寶藏神大明曼荼羅儀軌經上下二卷、其經曰、佛在楞伽國、此經廣說護摩粉壇諸印呪等、又蓋字函證契、大乘經佛在楞伽山說、彼經曰、率羅耶頂火山勝處諸大持明遊化栖託靈神所居、大乘同性經曰、大持呪神所居止處、此持

明神及持呪神只是一種兩經、同本異譯、故作異文、密教所謂持明仙也、持明神仙栖託之所如來於此須說密法、因此等而言、楞伽山中顯密並說、結集聖人依義分別爲異部耳、如來說法顯密交互無可疑矣、

〔禪餘或問〕上

或問、密者之釋迦說顯教不說密、大日說密教不說顯、二尊別佛是乎、曰、密者不學之過也、夫國無二主、世無二佛、釋迦大日只是真化之異耳、真化之別者權教也、實教中真化不二、我今出其端焉、大藏中絲字函有廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經三卷唐菩提流支譯、彼經曰、佛在王舍城於初會時、降伏拘胝魔軍、夫降魔者成道時也、按八相降魔者轉法輪先也、諸經論云、轉法輪成道後二七日三七日乃至數月、依此經而言在莊嚴先說祕密陀羅尼、不啻一呪建壇畫幃護摩印契等詳備矣、真化同體、顯密並說、機時不定、此經爲證、又高字函有最上大乘金剛大教寶王經二卷、宋法天譯、世尊在廣嚴城菴羅園說、下卷云、金剛手告大衆、汝等與我至佛所受灌頂、爾時學衆諸王等往世尊所、時世尊已在拘尸那城、爾時世尊、以金剛水爲諸學衆灌頂、釋迦牟尼卽於拘尸城入涅槃、固此而言、如來最後行灌頂事、而今涅槃經中無此事、依此二經、最初末後皆密法、是知如來四十九年顯密並說、然顯經無密、密經無顯者、結集聖人隨義分部耳、夫理趣般若者大般若經第五百七十八也、玄奘譯、密教云大樂金剛不空眞實三摩耶經、不空譯、二經文句不多違也、有少差異、奘譯曰

爾時如來復依遍照如來之相、空譯曰、時薄伽梵毘盧遮那如來、又奘譯曰、爾時世尊復依調伏一切惡法釋迦牟尼如來之相、空譯曰、時調伏難調釋迦牟尼如來、今案二經、奘譯遍照、空譯毘盧、梵漢之異、調伏惡法調伏難調只是一義然見奘譯依相之文、如來或現毘盧形、或現釋迦形也、理趣般若本是一法、真化二相本是一尊、奘譯爲顯、空譯爲密、大般若經爲第十會、金剛頂經爲第六會、向謂結集聖人隨義分部是也、

〔禪餘或問〕下

或問摩訶毘盧遮那此云大日、釋迦此云能仁、能仁爲化身、大日爲法身、教門通稱也、爲定制乎、曰大藏經字函有佛說解夏經一卷、其終偈云、我今禮法王無上大日尊、又有帝釋所問經一卷、其偈云、如來大日尊汝今稽首禮、二經共是應身教主、二偈共有大日尊文、故知大日如來通號、不必定爲法身稱號、

〔禪餘或問〕下

或問金剛頂經義訣云、梵網經是金剛頂淺略文爾乎、曰案指歸有十八會、其中有法身會、有報身會有應身會、梵網者報佛說故與金剛頂報身會合、是以梵網金剛頂同文者佳矣、淺略深祕者未爲定制云梵網說戒、戒者十度第二故爲淺略耳、曰佛說諸經、有體有宗、經法淺深只依體宗、不依名相、謂體宗者經旨也、名相者文句也、欲知經淺深、先見宗趣、不依文句、大乘同性經明佛十地曰、初

地者一切微細習氣除故、又復一切法得自在故、第二地者轉法輪故、說深法故、第三地者諸聲聞戒故、又復顯說三乘乃至第六地顯現無邊諸佛刹中從兜率天、下託胎乃至法滅、夫微細習氣除深法者佛地高下事也、說聲聞戒三乘法及八相者佛地低下事也、初二兩地何現高上、三六兩地何現低下乎、曰此十佛地始淺後深、故佛此後廣示初地相、至第二地、唯現光明別無所說、世尊告一切菩薩言、如來若說第二地、汝等一切尙難知聞、何況得見如來三地乃至十地、因此而言不必初高後下也、曰諸佛說法意趣難解、總說云第三地說聲聞戒、別說云第二地等尙難聞知、故曰只依體宗、不依名相、不特同性也、諸大乘經此類多矣、講家不委經旨、只見之句作此說者多矣、依義不依文者、鶴林妙旨也、凡讀經者三復乎、

〔禪餘或問〕下

或問密嚴國與華藏界爲同爲異、曰異也、密嚴者自性土法佛所依、華藏者受用土報佛所依、自性云寂光土、受用云實報土、此外同居土應佛所依也、密嚴經云、密嚴國者出過欲色無色、內證之境者自性土也、曰華藏在三界外、密嚴亦云出過三界、豈不同乎、曰法報二土共越三界、兩密嚴言法境者內證境故、華藏非內證、實報故、然此二土及娑婆只是一處、何以知者、密嚴經云、有持進菩薩於佛所生疑心、以神通昇上方如恒河佛世界、不見如來頂、是知娑婆外無密嚴、猶華嚴經佛在摩訶國菩提場中現華藏界、只此二土有廣狹、同居狹於實報、實報狹於寂光、法界宮光耀土密嚴國皆是寂

光之異稱也、

〔十禪支録〕下

寄密行僧

晨苑摘花擔用筇 曉瓶盛月水分江 風休燈滅夜岑寂 隱々鈴聲到客窓

第四章 覺心及び其門葉と密教

覺心は信濃の人、嘉祿元年出家し、高野山に登り、傳法院覺佛、正智院道範に眞言を受け、金剛三昧院に行勇に隨ひ、寶治元年上野長樂寺に往き、榮朝に従遊し、榮朝寂するの後、壽福寺の朗譽を訪ひ、後、東福寺辨圓の下に到り、建長元年入宋して、佛眼禪師に嗣法して歸朝す。時に建長六年なり。高野に登りて行勇を拜し、金剛三昧院領たる紀州由良庄西方寺に止りて化を布く。西方寺後に興國寺と改む。龜山上皇召して禪林寺を開き給ひ、永仁三年師繼又爲に妙光寺を開く。幾くもなく、由良に還り、永仁六年十月十三日寂す。年九十二。法燈國師と云ふ。門下に孤峰覺明、無住思賢、孤山至遠、東海竺源、高山慈照、恭良運良、嫩桂正宗等あり。

覺心著すところ、假名法語由良法語、法燈法語ともいふ、語録、坐禪儀などあり、榮朝、行勇、朗譽等榮西一派の禪風を受け、又、辨圓に親炙したりければ、自ら密教に關係を有し、且つ野山に住し、道範等の東密を受けたれば、歸朝の後と雖も、自ら密教の浸染脱し難きものあり。世に傳ふるものに、瑜伽印

明祕訣二卷あり。終に、實賢より道範に授け、道範より覺心に授けし旨を記せり。

抑由良庄は葛山五郎入道願性の所領なりしを、故主の菩提の爲め、金剛三昧院に寄進したるものにして、行勇と圖りて、一字の寺を建つ。即ち西方寺之なり。事は願性の寄進狀に詳かなり。云く、

寄進 高野山金剛三昧院

紀伊國由良庄間事

右件庄者鎌倉 禪定二品家御時願性所拜領仕也仍故武藏前司入道殿之御時申云 故君御入滅之時通世仕候畢彼庄者其後所賜候也然者願性一期者庄務仕死去之後者一向可奉寄進御寺之由令言上之處任申狀之旨成賜御教書了然間申合當院前 別當故莊嚴房法印御房寺務之時就令進案文被納御寺寶藏畢正文者其後令燒失畢而願性病體之上頓死橫死世間之習也若如然之時者以此狀可爲御寺御領者也次當庄内西方寺事四至田數等注文別紙在之件西方寺事同莊嚴房法印御房申合天佛閣一所可建立之由申定畢且置文在之仍奉讓心地房上人永爲佛法修行之地可奉訪兩聖靈之御菩提之由所定置也仍寄進狀如件

文永元年甲子八月九日

沙彌願性 在判

心地房上人とは覺心のことなり。建長六年八月、覺心宋より還り、高野に登り、康元元年第五長老眞空に嗣ぎて、金剛三昧院の第六長老と爲る。而して後、其寺領たる由良庄に下向して、西方寺

に住せしなり。斯くの如く、彼は高野に在りて、賴朝並に政子の菩提を弔ふべき金剛三昧院に住して、其行儀一に行勇に倣ひしものあるは疑ひを容れず。

文化十二年二月、興國寺にて發掘せしといふ安骨塔の銘あり。云く、

(梵字陀羅尼)

(梵字光明真言)

佛法僧寶 諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅爲樂

若以色見我 以音聲求我 是人行邪道 不能見如來

大宋四護國開山佛眼禪師書

心卽是佛 佛卽是心 心佛如々 亘古亘今

毘婆尸佛 尸棄佛 毘舍涼佛 拘留孫佛

拘那含牟尼佛 迦葉佛 釋迦文佛

達磨大師 月林禪師 佛眼禪師

鷲峰開山老僧覺心

弘安九丙戌四月十八日

入宋沙門覺心

生年八十書之

第五章 禪宗と大乘菩薩戒

上來述ぶるところに依り、榮西、辨圓一派の禪宗が如何に、台東兩密と深き交渉を有せしかを明にするを得たり。今や進みて、台密の他の一方面なる大乘菩薩戒と此等禪徒との交渉深きものあるを指摘せんとす。

大乘菩薩戒は最澄が奈良の六宗に對して、極力骨張したる題目なりしは、苟も日本の佛教史を知るものゝ忘れざるところなるべし。而して、此の大乘戒が元台密の徒たりし榮西、辨圓一派と關係あるべきは、誠に自然の理なりといはざるべからず。而して、そが未だ禪を主張せざる以前の出來事ならんには、論すべき限りにあらざれど、既に禪を主張するの後、其門下系統より、大乘戒の研究者並に實行者出でたるを以て觀察するに、建仁に置きしといふ圓密禪といひ、金剛三昧院の教律禪といひ、唯一時を糊塗する方便と觀るを得ざるものあるを奈何せん。請ふ左の事實を一考せよ。

榮西が戒律を嚴守せしは史上に見ゆるところにして、持律第一葉上房の稱ありしといふ。従て大乘戒と深き關係の存するは、建仁寺と萬壽寺京都の二寺なり。前者に圓琳出で、後者に覺空ありて、斯の方面亦台密との不可分の關係を暗示し、否明示するものあり。

一乘房法眼圓琳は榮西門葉の出にして、建仁寺第七代の住持と爲る。初め寶地房證眞、我禪房俊務に就いて、天台戒疏の講を聽き、筆録するところ卷を爲せり。「菩薩戒義疏鈔」六卷即ち之れなり。

世に又「圓琳鈔」と稱せらる。彼自ら此鈔に記するところに依れば、十五歳の時初めて叡山に登りて受戒し、東谷佛頂庵に住し、寶地房法印證眞の天台章疏の講演に侍し、十七歳の時に戒疏を受學し、「私記」並に「授戒儀」を授かる。二十五歳の時、即ち建保二年三月、泉涌寺に赴き、俊菴に従ひて、天台の大綱要義を聽き、兼ねて大小戒律を讀む中、天台戒疏を受け、併せて菩薩戒を授けらる。斯くの如く、叡山に於いては證眞、京都に於いては俊菴の說を受け、双方を前後補綴し、次に依りて編集し、綱を取りて鈔記し、經論及び諸師の說を引き、且つ所聞を補ひ、且つ同異を示せしもの斯書の草本にして、其の草本を嘉禎三年正月刪定して今の鈔と爲せり。之に依りて考ふるに、圓琳身は黃龍派の禪僧にてありながら、如何に台密一派の戒律に心膽を碎きしかを察するに足らん。

覺空は天台に出家し、俊菴に律を學び、又二尊院湛空に淨土と圓戒を受け、更に圓琳に就いて律を受け、圓仁善覺大師の「顯揚大戒論」の鈔、並に、「大小律儀各別鈔」を著はせり。了慧淨土宗望西樓弘安三年夏安居より同四年まで、萬壽寺に於て、覺空の戒疏を講ずるを聞き、筆録せしもの七卷あり。「天台菩薩戒疏見聞」といふ。了慧は源空の弟子辨長の弟子良忠の門に出で、三條流の祖と爲りし人なり。了慧が覺空に就いて聽講したる顛末を「見聞」の序文と跋語とに自ら述べたるを觀るに、覺空講律の事情明かなり。

弘安三年四月十七日、於洛陽萬壽禪院方丈覺空上人座下、一夏間學之、其時見聞不論要、清書之、

是非爲他、專爲備自廢忘也、且亦爲奉戀慕師範德也。以上序文

右所記義道奉値之師、覺空上人粗學之、自彼弘安三年庚辰、至今年元德二年庚午、冬天、已經五十二年、

廢學年久、老耄闇鈍、且悲先師教訓落地、且依學者所望難捨、向昔小字見聞寫、今清書卷軸、定聞

誑字落言、必有義道不究歟、論見得其意、請可添削、于時元德二年庚午十二月十一日、拭八十歲老眼寫

一部七卷見聞、見人必唱念佛十遍、救愚老沈淪矣。以上跋語

中に、叡山と南都の戒律の異同を辯じ、「菩薩戒通受遺疑鈔」に對し、自説を立するなど、全く律僧の面影あり。

第六章 結 論

以上章を重ねて述べしが如く、鎌倉時代に於ける禪宗の一派——特に榮西、辨圓、覺心の——には、表面直指單傳の宗風を傳ふと稱すれども、其事蹟に徴し、其言論に徴し、尙密教を用ひ、禪密双修の形蹟蔽ふ可からざるものあり。果して然らば、此間の解釋を如何にす可きか。これ鎌倉佛敎史上の一大疑問に屬す。

凡そ何事も支那を以つて先進國と爲し、時代は、専ら大陸の思潮に倣ふを以て肝要とし、其例證亦乏しからず。然れども、禪密双修の風は唐宋の時代彼地の風たりしを聞かず。禪と華嚴とは唐代既に澄觀、宗密の徒ありて、之を双修し、調和したりしと雖も、密に至りては、斯る傾向の著しき

を知らず。果して然らば、これ我が日本に於ける特殊の現象と観ざる可からず。

榮西が建仁寺を創むるや、圓密禪の三宗を置き、寺を天台の別院と爲し、行勇が金剛三昧院に住するや、教律禪の三宗を置けりといひ、而して、此等は天台の壓迫を避くる方便にして、榮西、行勇の本心は禪宗のみを主張したきも、時勢非にして、暫く隱忍して、時の到るを待てりといふ。沙石集に、

國ノ風儀ニソムカズシテ、教門ヲヒカヘテ、戒律天台眞言ナントアヒカネテ、一向ノ唐様ヲ行セラレズ、時ヲ待ユヘニヤ、又西天モ昔ハ經論アヒ兼タリ、漢土モ上代ハ三學ヘダテナカリケレド、深キ心アルベシ、殊ニ眞言ヲ面トシテ禪門ハ内行也ケリ。

といへるは、善意の解釋とも觀るべく、榮西が興禪護國論を著して、山徒の難に答へ、昔傳教大師天台を叡山に弘め、圓密禪戒の四宗を以て建立すと雖も、中世禪は亡びて痕跡を留めず。我れ今禪を傳ふるは、四種法門中の一を復興するなり。佛法相承血脈譜にも、達磨の血脈を以て首とす。我が禪豈他あらんや。之を察せずして、我を難するものは却つて祖師の本意に聞きものゝ所爲なりと辯解したるは、最もよく這般の消息を洩すものなりと解せられざるに非ず。

建仁寺が天台の別院と爲りしは、史實として疑ふべからざる證據あり。康永四年七月二十日山門申狀の一節に云く、

先禪法興行之段、中世以來連々貽山門之讐訴、後鳥羽院御宇、建久年中榮西能忍等弘此宗於洛中、南都北嶺共及騷動、至千建仁寺建立者、被置遮那止觀等諸宗之上、可爲山門之末寺之由、依申請令免許畢、

これ當時天台の跋扈甚しかりければ、其銳鋒を避けて、徐に禪宗を弘通せんとの政略的行動なりと解するを得ん。先之、平安の初期、空海南都諸宗と妥協的態度に出でしかば、東大寺は後世迄東寺以下を其末寺なりと主張したりき。されば、榮西等も亦空海の故智に倣ひしとせんも不當には非ず。確にさる形跡はありしなるべし。然れども、其後の行動に就いては又十分に批評せらるべき證據あり。これ實に千古未決の遺されたる疑問に非ずや。

空海は南都と妥協の方針に出でたりと雖も、祕密金剛乘を以て、無上の法味と爲し、第十の住心に配して、寸毫も譲るところなかりき。三論、法相、華嚴の教理並に法式に類する行動は少しも之なかりしなり。然るに、榮西、辨圓に至りては如何。天台の銳鋒を避くる一時の方便として、其建立の寺院を天台の末寺と爲すは、自らを保護する上に於て、蓋し已むを得ざりしならん。然れども何の必要ありて、常に密法を修し、入滅の際に至るまで、灌頂を行ひしぞ。これ單に政略上の行動とは觀る可からず。中心の欲求棄てんと欲して棄つる能はざるものありて然りしにあらざるか。彼等は勿論禪を以て最上無上の法と信するの念は奪ふべからざるものありしならん、而も密をも棄つ

る能はざる精神は一生命を通じて、亦更らざるものありしならん。更に著書に就て之を検せんか。大日經見聞並に瑜祇經見聞は思想上に於ける禪密の關係を批判すべき絶好の資料なりと雖も、惜いかな、禪密の關係に就て明白なる意思を表示するところなきを奈何せん。而して、後者の奥書に「南山北嶺、兩流、大事相交」口決せらるゝとあるが如く、兩著共に台密東密など、在來の思想に據りて述ぶるものにして、禪者として、台密又は東密に對する批判若しくは思想を吐露したるものに非ず。従て兩著の殘るありと雖も、這般の問題に對して、解決を與ふるものに非ず。唯、瑜祇經見聞中、左の一節の如きは、顯、密、禪を比較して、言を爲せるあるのみ。

問、所以不現、無二分明相之無相、月輪者、是自性清淨、本心也。然顯教以此心爲至極終窮、妙體、密教以此心更發阿字門、以爲布教本初、若亦於此自性、本心未起一字之時、有直立宗攝機乎。

答、不立文字、直指人心者、則此也。

最後に論すべきは眞禪融心義なり。斯書は既に述べしが如く、著者を明にせざるは遺憾なりと雖も、恐らくは、野山に於ける行勇一派の手に出づるものなるべく、禪と密との二門は、其途異りと雖も、歸趣一なる旨を力説せるものにして、思想上禪密の歸一を高潮せるものなり。されば、榮西一派の禪密双修に對する理論上の根據を與ふるものと觀察するも、寸毫の不可あることなし。これ正しく此時代に斯一派の抱懷せる思想を表現せるものと論斷するを得可し。かくして、左手に禪、右手に

密、左右双修せしものなること疑ふ可からず。而して、これ鎌倉初期に於て、密より禪に入りし人々の免る能はざりし禪風なりと解するを以て、最も妥當なる解釋なりと信ず。

(大正十五年十二月十一日夜再修了)

(附記)

以上は著者が多年研究の結果到達せし史觀にして、其概念を得たるは大正の初年に在り。かくて概要を當時東京豊山大學より發行せし「密教」誌上に發表せり大正三年同四年の同誌二冊に互りて第一章第二章第三章の大意を掲載せり然るに同誌は大正四年大典記念號を以て廢刊し、爾來空しく十年の歲月を経たり。其間史料を採訪する毎に、注意を怠らざりしも、獲るところ多からず。此に再び稿本を改修して、大方の批評を仰ぐことせり。唯憾むらくは、往年東福寺に在り、子院某師の厚意に依りて「密呪」と稱する聖一國師の灌頂印信集三卷を一覽したりしを、再び詳に閱するの好機に接せざることを。若し斯卷を再閱するを得ば、三たび稿を改めて、諸君の批評を仰がんことを期す。想ふに、這般の問題は日本禪宗史上の一大疑問に屬するものなれば、史家の研究題目として最も興味あるは勿論、禪宗諸宗匠の觀察を聽かんと欲するの念甚だ切なり。希くは、江湖博雅の士、高見を披いて、著者の蒙を開くところあらば何の幸か之に如かん。反對の意見の如き、大に歡迎するところなり。敢て一言を附記す。

(昭和二年三月二十日一校畢)